

子どもの否定的感情に対する養育者の 関わりと採用するしつけ方略との関連

— 3年間の縦断的調査より —

鹿 島 な つ め

The Relations of Parental Copings to Children's Negative
Emotions and Parental Control Strategies

Natsume Kashima

問題と目的

「しつけのつもりだった」と児童虐待事件加害者がコメントする報道を時折目にする。養育という長期の密接な関わりは、親子の間に様々な感情を喚起すると考えられる。しかし子どもの否定的な行動への関わりにおいて、親側の一方的な力が発動される時、それは物理的・心理的暴力に発展する可能性を持つ。

玉井（2009）は出生直後から親がみずからの行動を子どもに合わせ、相互交渉していく中で、「子どもは自分を守ってくれる大人の存在を確信すると同時に、自分が周囲の環境から適切で快い反応を引き出すことができるという感覚も身につけていく」と臨床の知見から述べ、しつけに応じる自分の行為が、親からの反応を統制（コントロール）できるという感覚が保証されることで、子どもはしつけを自分にとって肯定的なものと受け止めることができるとする。また加えて玉井は、虐待の関係性には大人側の子どもへの不正確でゆがんだ認知が存在し、そうした関係下で大人の力の行使にさらされた子どもは、大人の言動を自分の行為によって統制できないという経験を重ねるため、外界に対する適切な注意力の発達が阻害されると述べる。

つまり、本来しつけが子どもの情緒的・人格的な発達を阻害しない理由は、

子どもが「自分の行為次第で親の行動を統制可能と感じられること」と考えられる。この点がしつけと虐待の違いと仮定されるだろう。

臨床、不適切な養育と子どもの自己統制不全の関連については、奥山(2002)、杉山(2007)を筆頭に近年多く指摘されている。また大河原(2004)は重大犯罪を起こした少年の家族のタイプとして、虐待のタイプと過大な期待を少年に投影し、その期待のみが少年だと思っている養育者のタイプが存在することを挙げ、親子のコミュニケーション不全と「キレル」行為との関連のモデルを検討している。いずれも親の一方的な力が行使され、子ども側からの統制が実感されにくいと考えられる問題である。

虐待、不適切な養育の背後に、養育者の世代間伝達の問題や子どもへの不正確な認知があることは従来指摘されてきた(ex.Gil, 1991)。こうした関係性や認知の偏りが発現する場として、子どもの泣きや言うことを聞かない、かんしゃくを起こすなど子どもが否定的感情を表出する時が考えられる。

例えば子どもの泣きに対して養育者自身の生育史に関する未解決な問題が想起され、対応できない時(ex. 渡辺, 2001; 2012)、養育者に意識的な悪意がなくとも子どもの否定的感情は一方的に無視されることになってしまう。また子どもに虐待、不適切な養育のため愛着障害が生じている場合には、表面上反抗的行動が起りやすく、それがさらなる虐待、不適切な養育を引き起こし、不幸な結果となることも考えられる。

このように子どもが否定的感情を表出する場とは、養育者と子どもの関わりの質が浮かび上がる場であると考えられる。通常でも、幼児期の養育者と子どもの関わりは快感情を持つことのみが親和的なのではなく、母親の状態が悪い(疲労など)時やきょうだいげんかをしている時、子どもが友達とうまくあそべない時、日常的な課題はないがべたべたするなどの行動がみられる時、日常的課題があるのに子どもが不従順な時に、母親の不快感が生じることが報告されている(菅野, 2001)。そうした中で子どもの表出する否定的感情への養育者の関わりは、養育者の日常の賞め方や叱り方のしつけ方略への考えとどのような関連を持つのだろうか。

先行研究を見る限り、しつけ方略と母親の育児ストレスや子どもの感情理解

発達、自己制御発達との関連などは検討されているが、養育者の子どもの否定的感情への対し方と日常のしつけ方略との関連を扱ったものは多く見当たらない。またこれまで挙げた文献は臨床から得られた知見であり、数量化データによる検討は少ない状況である。そのため、本研究では養育者のしつけ方略についての考えと子どもの表出する否定的感情への対し方の関連を検討する。

本研究では養育者のしつけ方略について、東、柏木、Hess (1981) が母親の養育の日米比較研究において用いた Parental Control Preference Questionnaire (以下 PCPQ) を使用する。この質問紙は子どもがよいことをした時と悪いことをした時の2場面について、身体的、物的、言語的、社会的強化など、親の子どもへのいろいろなフィードバックの仕方を挙げ、それぞれのやり方について賛否の意見を「非常によい方法だ」「わりによい方法だ」「あまりよくない方法だ」「非常によくない方法だ」の4件法で測定するものである。

また、子どもが表出する否定的感情への関わり方については Fabes ら (1990) の COPING WITH CHILDREN'S NEGATIVE EMOTION'S SCALE (以下 CCNES) を使用する。

CCNES は Fabes ら (1990) が開発した幼児から小学校低学年の子どもがストレスフルな状況で表出する否定的感情への養育者の反応の程度と対処の傾向を測る尺度である。1 場面に6つの反応パターンが提示され、養育者は日頃行いそうな程度を7件法で回答する。

6 反応パターンは、Distress Reactions (DR: 養育者が子どもの否定的感情表出を苦痛に思う反応 例: 子どもの怒りの表出に対して子どもに怒る)、Punitive Reactions (PR: 処罰的反応 例: 子どもの怒りの表出に対して子どもを別の部屋に行かせる)、Expressive Encouragement (EE: 表出の奨励 例: 子どもの怒りの表出に対して承認し、表出を勧める)、Emotion-Focused Reactions (EFR: 情動焦点的反応 例: 子どもの怒りの表出に対して子どもの感情が回復する方策を援助する)、Problem-Focused Reactions (PFR: 問題焦点的反応 例: 子どもの怒りの表出に対してその原因を解決する方策を援助する)、Minimization Reactions (MR: 軽視する反応 例: 子どもの怒りの表出を軽視する、また子どもの反応や状況を低く見積もる) の6項目の subscale

として、各反応の得点集計が可能である。Fabesら（2001）はCCNESを用いた調査で、養育者の厳格なCoping（PR, MR）と子どもの持つ否定的感情の激しさに有意な相関（ $r = .44, p < .001$ ）が見られたことと、養育者の厳格なCopingと子どもの社会的有能感（Social competence）との間に負の相関（ $r = -.51, p < .001$ ）がみられたことを報告している。

本研究では全12場面のうち日本人幼児において頻出しやすいと思われる7場面（CCNES1, 2, 3, 4, 5, 6, 8 誕生日会に行けない怒り、過失で自転車を壊し驚き泣く、大切なものをなくして泣く、注射を怖がる、養育者との分離に動揺、期待と異なるプレゼントへのいら立ち、他の子どもからいじめられて泣きそう）を翻訳し、英文の専門家の校閲を経て使用した。

方法

被調査者：A県内の5保育園に在籍する子どもの養育者のべ130名。被調査者は2009年度に3-4歳児クラス（年少組）に在籍した子どもを持つ養育者であり、2011年度に子どもが5-6歳児クラス（年長組）になるまで計3回調査に回答した。被調査者は2009年度104名（母親95名、父親7名、その他2名）、2010年度112名（母親105名、父親5名、その他1名）、2011年度109名（母親104名、父親4名、その他1名）であった。

調査手続き：子どもの情動制御発達に関する調査の一環として、2009年度から2011年度にかけて年度末に計3回質問紙調査を行った。調査の前には調査趣旨に関する説明文書を配布した。

調査は、記入内容は研究者のみが閲覧することを明記した上で記名式にて行い、記入後は添付の封書にて保育園に提出してもらう方式を取った。質問紙のフェイスシートでは、被験調査者と保育園に在籍する子どもとの関係性、子どものきょうだい数と出生順位について回答を求めた。

被調査者には他の調査も含めた全調査の謝礼として、後日図書カードを配布した。質問紙の回収率は2009年度84.6%、2010年度84.2%、2011年度82.7%であった。

PCPQのしつけ方略回答は、「非常によい方法だ」を3点、「わりにより方法

Table 1 PCPQ しつけ方略の平均値

| | 2009 年度 | 2010 年度 | 2011 年度 |
|---------------------------------------------------------|----------------|----------------|----------------|
| (子どもがよいことをした時のしつけ方略) | | | |
| 1. ほほずりしたり、頭をなでたり、だいたりする | 2.77 (0.47) | 2.73 (0.48) | 2.74 (0.48) |
| 2. “よってきたね”“とてもいいわ”などという | 2.85 (0.36) | 2.78 (0.44) | 2.80 (0.42) |
| 3. うなづいたり、にこにこしてあげたり、満足そうに見つめたりする | 2.38 (0.55) | 2.41 (0.68) | 2.37 (0.59) |
| 4. “__ちゃんはいいい子ね”“__ちゃんはずばらしいわ”などという | 2.06 (0.75) | 2.02 (0.69) | 2.01 (0.74) |
| 5. 子どもが欲しがっているものを買ってあげる約束をしたり、ごほうびをあげる | 1.07 (0.64) | 1.12 (0.71) | 1.14 (0.67) |
| 6. だまってみまっている | 1.02 (0.75) | 1.02 (0.73) | 0.96 (0.74) |
| 7. ごほうびとして、好きなことを自由にさせてあげる | 1.06 (0.74) | 1.03 (0.69) | 0.97 (0.72) |
| 8. ほかの人の前でほめてあげる | 1.95 (0.81) | 1.85 (0.82) | 1.80 (0.75) |
| (子どもが悪いことをした時のしつけ方略) | | | |
| 1. ぶったり、たたいたりする | 0.84 (0.72) | 0.83 (0.59) | 0.73 (0.65) |
| 2. “よい子は、そんなことはしないものよ”という | 1.28 (0.71) | 1.29 (0.68) | 1.12 (0.75) |
| 3. 首を横にふったり、めつという顔をしたり、いけません、というように顔でしらせる | 1.91 (0.61) | 1.74 (0.72) | 1.83 (0.72) |
| 4. (こらしめとして)その子の好きなものや、欲しがっているものをやらなかったり、しばらくおあずけにしたりする | 1.27 (0.79) | 1.12 (0.83) | 1.24 (0.68) |
| 5. “ダメ”とか“わるい子ねえ”などといって、ことばでたしなめる | 1.31 (0.78) | 1.40 (0.79) | 1.29 (0.67) |
| 6. ほかの部屋につれていって、一人だけにしておく | 0.58 (0.59) | 0.56 (0.66) | 0.70 (0.69) |
| 7. “そんなことをすると、お父さんに叱られますよ”という | 1.03 (0.85) | 0.97 (0.76) | 1.01 (0.76) |
| 8. “そんなことをするとかわいがってあげませんよ”とか“そんなことをする__ちゃんはきらいよ”などという | 0.51 (0.66) | 0.61 (0.62) | 0.47 (0.57) |
| 9. だまって、みすごしておく | 0.20 (0.43) | 0.21 (0.41) | 0.19 (0.46) |
| 10. “__ちゃんがしたことは、お母さんはいけないと思うなあ”などという | 2.53 (0.62) | 2.54 (0.64) | 2.49 (0.55) |

()内は SD

Table 2 子どもの否定的感情への養育者の関わり (CCNES) の平均値と反復測定分散分析結果

| | 2009年度 | 2010年度 | 2011年度 | |
|------------------------------------|----------------|----------------|----------------|-----------------------|
| DR (Distress Reactions) | 2.59 (0.68) | 2.61 (0.70) | 2.97 (0.65) | F(1,725)=11.77 p<.001 |
| PR (Punitive Reactions) | 3.24 (0.79) | 3.37 (0.83) | 3.34 (0.89) | ns |
| EE (Expressive Encouragement) | 3.31 (0.98) | 3.29 (1.03) | 3.27 (1.01) | ns |
| EFR (Emotion-Focused Reactions) | 4.82 (0.77) | 3.88 (0.76) | 4.56 (0.85) | F(2)=57.68 p<.001 |
| PFR (Problem-Focused Reactions) | 4.73 (0.77) | 4.65 (0.73) | 4.73 (0.75) | ns |
| MR (Minimization Reactions) | 3.38 (0.96) | 3.58 (1.03) | 3.54 (1.04) | ns |

()…SD

だ」を2点、「あまりよくない方法だ」を1点、「非常によくない方法だ」を0点に得点化した。また、CCNESの回答は全7場面への回答から6項目の subscale 得点を集計し、各被調査者の各 subscale 平均得点を算出し使用した。

結果

被調査者の中には双子を持つ養育者が4名いたため、同一養育者が2回回答していた3組については双子の一方の出生順位の高い方の質問紙を検討に採用した。全4組が性別の異なる双子だったため、性差を検討する際にはどちらの性別にも双子の養育者4名を入れて検討した。

記述統計：各年度のPCPQ、CCNESの平均値をTable1, 2に示す。

各年度のPCPQ各項目の変化について、1要因3水準の反復測定分散分析(n=78-82)を行ったが、全項目で年度の主効果は有意ではなかった。また出生順位の主効果も有意ではなかった。

また子どもの性別によるしつけ方略の違いを考慮するため、PCPQ各年度全項目についてt検定を行ったところ、3項目で子どもの性別による平均値の違いが見られた。2009年度の「3.うなづいたり、にこにこしてあげたり、満足そうに見つめたりする」(t=2.24, p<.05)、「4.“ちゃんはいいい子ね” “ちゃ

んはすばらしいわ” などという」($t=2.35, p<.05$) は、子どもが男児の場合に養育者が有意に多く採用する方略であり、2011年度の「1.ほほずりしたり、頭をなでたり、だいたりする」($t=-2.04, p<.05$) は、子どもが女児の場合に養育者が有意に多く採用する方略であった。他の項目については、子どもの性差は有意ではなかった。

以上より養育者のしつけ方略には子どもの性差の影響があるものの、子どもの発達や養育経験とは独立した、一貫した傾向があると考えられた。

各年度の CCNES6 項目 subscale の変化について 1 要因 3 水準の反復測定分散分析 ($n=69-70$) を行った。結果、DR と EFR で年度の主効果が有意であった。多重比較の結果、DR で 2009 年度と 2011 年度、EFR での 2010 年度と他年度との平均値の差が有意であった。また分散分析の結果、CCNES について子どもの性差の主効果はなかった。

以上より、CCNES には子どもの性差の影響はないが、子どもの発達に伴って変化する項目が存在した。

PCPQ しつけ方略と CCNES による子どもの否定的感情への関わり方の関連性：PCPQ しつけ方略の分類のため、2009 年度の PCPQ しつけ方略回答を用いて因子分析を行った。

天井効果の見られた良 1.「ほほずりしたり、頭をなでたり、だいたりする」、良 2.「よくできたね” “とてもいいわ” などという」、良 3.「うなづいたり、にこにこしてあげたり、満足そうに見つめたりする」、悪 10.「“ ちゃんがしたことは、お母さんはいけないと思うなあ”」の 4 項目と、フロア効果の見られた悪 6.「ほかの部屋につれていって、一人だけにしておく」、悪 8.「“そんなことをするとかわいがってあげませんよ” とか “そんなことをするちゃんはきれいよ” などという」、悪 9.「だまって、みすごしておく」の 3 項目を除外し、11 項目について主因子法による因子分析を行った。固有値の変化より 3 因子構造が妥当と考え、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。因子負荷量の低い 2 項目を分析から除外した、プロマックス回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を Table3 に示す。プロマックス回転前の全分散における因子寄与率は 57.99% だった。

第1因子は悪1.「ぶったりたたいたりする」や「叱られる」、「こらしめる」という懲罰に関わる内容が項目に多いため、「懲罰的しつけ」因子と命名した。第2因子は、「ごほうび」に関わる項目であることから「褒賞的しつけ」因子、第3因子は、両項目とも言語で良悪を評価する内容であることから「言語評価的しつけ」因子と命名した。

上記の因子によるPCPQしつけ方略の下位尺度項目平均値を算出し、PCPQしつけ方略下位尺度間の相関とPCPQしつけ方略下位尺度とCCNES 6 subscaleの相関を年度別にTable4, 5, 6に示す。

特徴的な点としては、全年度にわたって、「懲罰的しつけ」とPR (Punitive Reactions) とMR (Minimization Reactions) に有意な相関が見られた。2010年度はEFR (Emotion-Focused Reactions) がすべてのPCPQしつけ方略下位尺度と有意に相関し、PFR (Problem-Focused Reactions) が「言語評価的しつけ」と有意に相関した。また「懲罰的しつけ」と「褒賞的しつけ」が有意に

Table 3 PCPQ11 項目の因子分析結果 (プロマックス回転後の因子パターン)

| 項目内容 | 因 子 | | |
|-----------------------------------------------------------|-------|-------|-------|
| | I | II | III |
| 悪 1. ぶったり、たたいたりする | .699 | .116 | .127 |
| 悪 7. “そんなことをすると、お父さんに叱られますよ”という | .607 | .131 | .305 |
| 悪 4. (こらしめとして)その子の好きなものや、欲しがっているものをやらなかったり、しばらくおあずけにしたりする | .576 | .140 | .302 |
| 悪 2. “よい子は、そんなことはしないものよ”という | .407 | -.030 | .338 |
| 良 7. ごほうびとして、好きなことを自由にさせてあげる | .183 | .828 | .118 |
| 良 5. 子どもが欲しがっているものを買ってあげる約束をしたり、ごほうびをあげる | .243 | .521 | .136 |
| 良 6. だまってみまもっている | -.025 | .471 | -.031 |
| 悪 5. “ダメ”とか“わるい子ねえ”などといって、ことばでたしなめる | .520 | -.001 | .816 |
| 良 4. “_____ちゃんはいいい子ね” “_____ちゃんはすばらしいわ”などという | .061 | .121 | .376 |

Table 4 2009 年度 PCPQ しつけ方略各因子と CCNES 各 subscale の相関

| | PCPQ 褒賞 09 | PCPQ 評価 09 | DR09 | PR09 | MR09 | EFR09 | PFR09 | EE09 | 平均値 (SD) | SD |
|------------------|---------------|---------------|-------|---------|---------|-------|-------|------|-------------|------|
| PCPQ 懲罰的しつけ 09 | | .307** | .253* | .389*** | .404*** | | | | 1.11 | 0.54 |
| PCPQ 褒賞的しつけ 09 | - | | | | | | | | 1.04 | 0.53 |
| PCPQ 言語評価的しつけ 09 | | - | | .231* | .273** | | | | 1.69 | 0.61 |

*. p<.05 ** . p<.01 ***. p<.001

Table 5 2010 年度 PCPQ しつけ方略各因子と CCNES 各 subscale の相関

| | PCPQ 褒賞 10 | PCPQ 評価 10 | DR10 | PR10 | MR10 | EFR10 | PFR10 | EE10 | 平均値 (SD) | SD |
|------------------|---------------|---------------|--------|---------|---------|---------|--------|------|-------------|------|
| PCPQ 懲罰的しつけ 10 | .422*** | .355*** | .242* | .481*** | .451*** | .431*** | | | 1.05 | 0.48 |
| PCPQ 褒賞的しつけ 10 | - | .202* | .260** | .328** | .275** | .331** | | | 1.05 | 0.53 |
| PCPQ 言語評価的しつけ 10 | | - | | | .246* | .309** | .320** | | 1.71 | 0.55 |

*. p<.05 ** . p<.01 ***. p<.001

Table 6 2011 年度 PCPQ しつけ方略各因子と CCNES 各 subscale の相関

| | PCPQ 褒賞 11 | PCPQ 評価 11 | DR11 | PR11 | MR11 | EFR11 | PFR11 | EE11 | 平均値 (SD) | SD |
|------------------|---------------|---------------|------|---------|-------|---------|-------|------|-------------|------|
| PCPQ 懲罰的しつけ 11 | .367*** | .243* | | .342*** | .205* | | | | 1.03 | 0.49 |
| PCPQ 褒賞的しつけ 11 | - | | | .212* | | | | | 1.02 | 0.57 |
| PCPQ 言語評価的しつけ 11 | | - | | | .195* | .393*** | .231* | | 1.64 | 0.49 |

*. p<.05 ** . p<.01 ***. p<.001

※有意な相関係数のみ記載

相関した。2011 年度は EFR、PFR は「言語評価的しつけ」と相関し、2011 年度も「懲罰的しつけ」と「褒賞的しつけ」が有意に相関した。

養育者の子どもが表出する否定的感情への関わり方がしつけ方略に与える影響：養育者の子どもが表出する否定的感情への関わり方が PCPQ しつけ方略に与える影響を検討するため、しつけ方略各下位尺度を予測変数、CCNES6 subscale を説明変数として重回帰分析を行った。

重回帰分析の結果、「懲罰的しつけ」では 2009 年度子どもの 3-4 歳児クラスの時点で MR (Minimization Reactions) からの標準偏回帰係数が有意であっ

Table 7 PCPQ 懲罰的しつけ方略に対する子どもの否定的感情への養育者の関わりの影響：重回帰分析結果

| | 2009年度 | 2010年度 | 2011年度 |
|----------------|---------|---------|---------|
| | β | β | β |
| DR | .152 | .036 | .056 |
| PR | .124 | .280* | .342** |
| MR | .291* | .115 | -.024 |
| EFR | .086 | .289* | .042 |
| PFR | .041 | .070 | .025 |
| EE | -.052 | -.152 | -.067 |
| R ² | .214** | .346*** | .132** |

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

 β ：標準偏回帰係数

Table 8 PCPQ 褒賞的しつけ方略に対する子どもの否定的感情への養育者の関わりの影響：重回帰分析結果

| | 2009年度 | 2010年度 | 2011年度 |
|----------------|---------|---------|---------|
| | β | β | β |
| DR | -.055 | .176 | .040 |
| PR | .029 | .214 | .204 |
| MR | .086 | -.112 | .059 |
| EFR | -.025 | .307* | .211 |
| PFR | .044 | -.017 | -.282 |
| EE | .009 | .047 | .080 |
| R ² | .011 | .190** | .111 |

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

 β ：標準偏回帰係数

Table 9 PCPQ 言語評価的しつけ方略に対する子どもの否定的感情への養育者の関わりの影響：重回帰分析結果

| | 2009年度 | 2010年度 | 2011年度 |
|----------------|---------|---------|---------|
| | β | β | β |
| DR | -.203 | -.002 | .018 |
| PR | .220 | -.061 | -.065 |
| MR | .194 | .181 | .200 |
| EFR | -.021 | .135 | .355** |
| PFR | .009 | .285* | -.004 |
| EE | .020 | -.011 | .032 |
| R ² | .098 | .185** | .174** |

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

 β ：標準偏回帰係数

たが、2010年度にはPR (Punitive Reactions) とEFR (Emotion-Focused Reactions) からの標準偏回帰係数が有意となり、2011年度にはPRからの標準偏回帰係数のみが有意となった。

「褒賞的しつけ」は2009, 2011年度では養育者の子どもの否定的感情への関わり方がしつけ方略を説明せず、2010年度子どもが4-5歳児クラスの時点でEFRからの標準偏回帰係数が有意であった。

「言語評価的しつけ」は2009年度では養育者の子どもの否定的感情への関わり方がしつけ方略を説明せず、2010年度子どもが4-5歳児クラスの時点でPFR (Problem-Focused Reactions) からの標準偏回帰係数が有意であり、2011年度子どもが5-6歳児クラスの時点ではEFRからの標準偏回帰係数が有意であった。

考察

PCPQ、CCNESの記述統計より、養育者のしつけ方略の賛否は子どもの性差の影響がみられるが、子どもの年齢による変化は見られない。しかし、養育者の子どもの否定的感情への関わり方は子どもの加齢に伴い変化していることが見られた。つまり、しつけ方略への賛否とは養育者のある程度一貫した養育観であると考えられる。また、子どもの否定的感情への関わり方は日々の子どもとの関わりに影響を受ける、状態的なものなのではないかと考えられた。

CCNESにおけるDR (Distress Reactions) は、子どもが3-4歳児クラスの時点(2009年度)より5-6歳児の時点(2011年度)で有意に高かった。またEFR (Emotion-Focused Reactions) は子どもが4-5歳児クラスの時点で有意に低かった。

DRが年長で有意に高いことから、5-6歳児の否定的感情表出に対して、養育者はより苦痛を感じる傾向があると考えられる。しかしTable6での検討よりしつけ方略との相関は見られない。ここから、5-6歳児の時点での否定的感情表出はしつけの過程で表出されるものではなく、逸脱的な文脈で見られる表出である可能性が考えられる。つまり、養育者にとって5-6歳児の否定的感情表出は逸脱的と考えられるがゆえに苦痛として受け取られているのではな

いかと考えられた。

EFRは子どもが4-5歳クラス時点での表出が有意に低かった。養育者は子どもが4-5歳児クラスの時点で、子どもの否定的感情表出に対して感情を回復させようとする方略を抑えていることがわかる。

ではなぜ養育者は4-5歳児クラス時点における子どもの否定的感情表出に対し、感情を回復させようとする方略を抑えるのだろうか。

しつけ方略各下位尺度を予測変数、CCNES6subscaleを説明変数とした重回帰分析の結果、4-5歳児時点で養育者が志向する懲罰的しつけ方略、褒賞的しつけ方略には、子どもが否定的感情から回復することに焦点を当てた援助(EFR)が影響していた。言語評価的しつけ方略では、4-5歳時点ではPFR(Problem-Focused Reactions)が影響し、5-6歳児時点でEFRが影響していた。

ここから、子どもの4-5歳児時点において、養育者は懲罰的、褒賞的と傾向はあるにしろ、しつけとして子どもの行動を社会的に適応できる方向に向けようとするため、養育者が子どもの否定的感情表出をすべて受け止め和らげるという感情の回復方略(EFR)を行わなくなると考えられる。そのため養育者のEFR Copingは一時抑えられるが、その一方で4-5歳時点ではしつけ方略と共に提示される形で養育者のEFRが示されているのではないだろうか。例えば、「そんなことをすると叱られますよ。だから我慢しようね」、「あの時怒らなかったから偉かったね。だからごほうびを買ってあげようね」というように、懲罰的にしても褒賞的にしても、ある行動(否定的感情表出を含む)のコントロールと共に子どもの感情に焦点を当てた関わりを、4-5歳時点の子どもを持つ養育者はしているのではないかと考えられる。

言語評価的しつけ方略の結果はこの推測を支持すると考えられる。言語評価的しつけ方略の項目は「“ダメ”とか“わるい子ねえ”などといって、ことばでたしなめる」、「“ちゃんはいいい子ね” “ちゃんはずばらしいわ”などという」という言葉で子どもの行動を評価するものであるが、子どもの4-5歳時点ではPFRが影響している。つまり子どもの4-5歳時点では、子どものする行動の「悪い」「いい」という評価的しつけ方略は、養育者の子ど

もの否定的感情の原因について方略を提示する関わりと共に提示されている。例えば「お友達がおもちゃを貸してくれなかったから怒るなんてよくないよ。貸して、とか一緒に使おうとか言えばよかったんだよ。」というような言葉であろうか。否定的感情の原因への方略を示しながら、この行動は「悪い」「いい」という評価を伝えていると考えられる。そして5-6歳児時点では、「悪い」「いい」という評価を子どもの感情に焦点を当てた関わりと共に行うようになっていくと考えられる。つまり「泣かないで頑張っている子だったね」というように、「悪い」「いい」と評価することと子どもの感情の回復を担う関わりが共に提示されるようになっていくと考えられる。

このように4-5歳以降の子どもの持つ養育者は、子どもを適応的な行動に導くためにしつけ方略と子どもの否定的感情へのEFRを同時に提示していると考えられる。懲罰的しつけ方略も褒賞的しつけ方略も同様な過程をたどることから考えると、世代間伝達のように、人間が自分の受けた養育スタイルを肯定的に見てしまう傾向は、EFRのように自分の感情を理解し回復させようと焦点を当てる関わりと同時にしつけ方略が提示されるからかもしれない。

そしてこの点は、虐待、不適切な養育と通常のしつけとの違いも示していると考えられる。不適切な養育におけるしつけとは、大人の方で子どもに従順（時に年齢不相応な）を強いるものである。しかし本研究においてしつけ方略をEFRが説明することは、この時期の親子の関係性が通常また双方向なものであることを示すと思われるからである。

こうした結果は先行研究の結果とも矛盾しない。菅野（2001）は、母親の不快感情は母子のズレによって引き起こされ、母親は自らの不快感情を契機に子どもの育ちを展望したり、自らの育児を振り返ったりしていると述べる。そして思い通りにならない我が子に直面し、子どもの内的状態を察することで子どもの他者性を認識するといった、親自身の発達や子どもの（自立への）発達が不快感情を機に促されているのではないかと考察している。4歳前後は通常発達の子どものおいて、自己と他者の視点、信念の違いを理解できるようになる「心の理論」(theory of mind) が獲得される時期とされているが（子安・木下, 1997）、こうした子ども側の発達によって親子間に他者性の認識が生じる

ことも4-5歳時点での関わりの変化を準備するのではないだろうか。

しかしこうした他者性の認識が養育者に否定的に受け取られた場合、しつけは養育者の認識世界との同一化を子どもに強いる行動となってしまうと推測される。Table7の重回帰分析結果は、子どもの3-4歳時点での懲罰的しつけ方略をMR (Minimization Reactions: 軽視する反応) が有意に説明し、4-5歳時点、5-6歳時点での懲罰的しつけ方略をPR (Punitive Reactions: 処罰的反応) がまた、有意に説明することを示している。つまり子どもの否定的感情表出に対し、軽視する反応と罰を与えるように関わる傾向が、懲罰的なしつけ方略への賛同を説明したのである。ここから子どもの否定的感情表出が否定的に受け止められる、つまり子どもの他者性が否定的に受け止められる場合、罰的なしつけ方略が好まれることが考えられた。

本研究は、養育者の内的要因である感情への態度としつけへの考え方を検討しているため、近い概念の関連性を検討したと考えられる。しかし養育者の持つ、自分とは異なる他者である子どもの否定的感情への関わり方と養育者の賛同するしつけ方略との関連性を示したことは意義深いと思われる。この関連性には養育者自身の持つ、自己と他者の関係性が反映されていると推測された。養育関係の中で、養育者自身と子どもの他者性をどのように受け止めていくかが関わりの質に影響していると考えられる。この点を今後の課題とし、子どもの情動制御発達への影響を検討していきたい。

引用文献

- 東 洋, 柏木恵子, R.D.ヘス 1981 母親の態度・行動と子どもの知的発達-日米比較研究- 東京大学出版会
- Fabes, R.A., Eisenberg, N., &Bernzweig, J. 1990 *The Coping with Children's Negative Emotions Scale*. Unpublished document available from the first author, Arizona State University, Tempe.
- Fabes, R.A., Leonard, S. A., Kupanoff, K., &Martin, C.L. 2001 Parental Coping with Children's Negative Emotions : Relations with Children's Emotional and Social Responding. *Child Development*, **72**, 907-920.
- ギル E. 西澤哲 (訳) 1997 虐待を受けた子どものプレイセラピー 誠信書房
(Gil, E 1991 THE HEALING POWER OF PLAY : Working with Abused Children The

Guilford Press A Division of Publications, Inc. New York.)

- 子安増生・木下孝司 1997 <心の理論>研究の展望 心理学研究 68 (1), 51-67.
- 大河原美以 2004 親子のコミュニケーション不全が子どもの感情の発達に与える影響
—「よい子がきれる」現象に関する試論— カウンセリング研究, 37, 180-190.
- 菅野幸恵 2001 母親が子どもをイヤになること：育児における不快感情とそれに対する説明づけ 発達心理学研究, 12 (1), 12-23.
- 杉山登志郎 2007 子ども虐待という第四の発達障害 学習研究社
- 玉井邦夫 2009 特別支援教育のプロとして子ども虐待を学ぶ 学習研究社
- 渡辺久子 2001 乳幼児精神保健の新しい動向 別冊発達 24 2-11, ミネルヴァ書房
- 渡辺久子 2012 赤ちゃんの精神保健—母子を守る社会風土の再生 こころの科学
166, 16-23 日本評論社

謝辞：本研究は2008-2011年度文部科学省若手研究（B）科学研究費「幼児期の対人場面における否定的情動認知と情動制御発達の横断的・縦断的検討」（課題番号20730465）の助成を受けて行われた研究の一部である。

西南学院大学人間科学部児童教育学科